

やまがた「県土未来図」

(豊かな県土を次世代に引き継ぐために)



平成18年3月

山形県土木部

はじめに

現在、我が国は、本格的な人口減少社会の到来やグローバル化の進行による地域経済への影響、今後の地方行政の行方を決める三位一体改革、地球環境問題への対応など、まさに「転換・変革の時代」を迎えています。このような時代のなか、社会基盤整備についても、旧来の「画一的整備」といった考え方から、利用者の立場に立った地域性や多様性を重視した社会基盤づくり、既存施設のこれからの時代にあった利活用、さらには地域間の連携による社会基盤の相互利活用へと考え方の転換が求められています。

我が国の社会基盤は、戦後の荒廃した時代から、高度経済成長期を経て、着実に整備が進められてきた結果、現在では欧米諸国並に整ってきたと言われていています。しかしながら、本県の整備水準を見ると、高速道路が全国水準に達していないことや都市機能の整備が遅れていることなど、県民の誰もがいきいきと生活し、活力と魅力溢れる山形県を実現していくためには、これからも必要な社会基盤の着実な整備に取り組んでいかなければならないと考えています。

また、近年多発する地震災害等の大規模な災害に適切に対応するため、危機管理の面でも、市町村や県の枠組みを越えた連携をより一層強化し、県民の生命、財産を守っていかなければなりません。

一方、県内経済は長期的に低迷し税収が伸びず、財政状況の厳しさが増すなかで、公共事業を進めるにあたっては、事業の選択と集中、効率的で効果的な整備、コストの縮減、事業目的や効果などの説明責任が強く求められているところです。

社会基盤は、日常生活から広域的な経済活動まで、県民生活に密接に関係しています。その整備には何年もの期間を要するため、計画的に整備することが必要です。そして、そのための投資の必要性について、県民や市町村の理解がますます重要になってくると考えられます。一方、社会基盤の整備を担当する県の職員は、今担当している業務が、県の行政の中でどのような位置づけになっているのか、また、建設行政がどのような方向に向かっているのか、ということ常意識しながら業務を行うことができれば、担当している業務からより質の高い成果が得られるものと考えられます。

このような観点から、県づくりの基本指針である「やまがた総合発展計画」を補完しながら、山形県の社会基盤整備が目指す次世代の県土のすがたとして、“活力があり・美しく・楽しい山形”を掲げ、2030年を目標にそれを実現するための取り組み方針、施策の柱などを、“やまがた「県土未来図」”として取りまとめ、建設行政の目指す方向を、県民や多くの人々にわかりやすく、また、建設行政を担当する職員の共通の認識となるよう示すこととしました。

「100年後にも誇りに思える元気なふるさと“やまがた”」の実現のため、より一層県民の皆様と共通の理解に立ち、建設行政を担当する職員が一丸となって、“やまがた「県土未来図」”を指針として県土づくりに努力してまいりたいと考えています。

平成18年3月

山形県土木部長 池田 隆

目 次

はじめに	
第1章 “やまがた「県土未来図」”の策定目的、構成、目標年次等	1
第2章 時代とともに変化する社会基盤の役割	6
第1節 社会基盤整備のこれまでのあゆみと成果	6
第2節 時代の変化と新たな課題	10
第3章 目指すべき次世代の県土のすがた(2030)	17
第4章 基本理念、県土づくりを進める7つの視点	21
第5章 基本目標、社会基盤の整備水準と維持管理	37
第1節 基本目標と施策の柱	38
第2節 社会基盤の整備水準と維持管理	55
第3節 建設行政を担う職員としての意識改革と能力開発	91
第4節 時代の変化への対応や課題	93
第6章 施策群、施策(プロジェクト)	94
策定経過報告	111
建設行政に関する県内の主な出来事	

表紙の説明

「子ども夢未来宣言」は、県民みんなで、“やまがた総合発展計画”の目標を実現するための第1歩を力強く踏み出し、今の子どもたち、さらに、その子供たちの世代へ、夢に充ちた未来を約束するという「こころざし」を述べたものであり、建設行政はそれを三角形の底辺で下支えしていることをイメージしている。

また、表紙の色は、土木の「土」の色と「木」の色を掛け合わせた上で、明るい未来をイメージさせるような色合いに調合したものである。